資　　料

新型コロナウィルス感染拡大状況下での初年次教育の取り組み

清　水　万　由　子

要旨

2020年初頭より生じた新型コロナウィルス感染症の世界的大流行のもと、龍谷大学では2020年度第１学期にビデオ会議システムなどを使ったオンライン授業を全面的に導入した。本稿は、龍谷大学政策学部の初年次教育である基礎演習における、オンライン授業の導入準備と実施の過程を記録したものである。半年間の経験から、オンライン授業で十分にアカデミック・スキルの獲得は達成できる部分もあるが、非言語コミュニケーションや身体的経験を通したジェネリック・スキルの獲得には課題があることがわかった。今後も、オンラインツールを活用しながら対面授業の質を向上させ、次なる非常事態に備える必要があり、今回の経験から学ぶことは多い。

キーワード

新型コロナウィルス感染症、初年次教育、オンライン授業、アカデミック・スキル、ジェネリック・スキル

Abstract

Under the gloal pandemic of COVID-19 that occurred from the beginning of 2020, Ryukoku University fully introduced online education in the spring semester of 2020. This paper records the process of preparation and implementation of online lessons in the first-year experience of the Faculty of Policy Science, Ryukoku University.

From the experience of half a year, it was found that while there are some areas where the acquisition of academic skills can be achieved sufficiently in online classes, there are also challenges in acquiring generic skills through nonverbal communication and physical experience. In the future, we will continue to learn a lot from this experience in order to improve the quality of face-to-face lessons and prepare for the next emergency while utilizing online tools.

Keywords

Corona-Virus Disease-2019 (COVID-19), first-year experience, online-education, academic skills, generic skills

Ⅰ　はじめに

2020年初頭より新型コロナウィルス感染症（COVID-19）の世界的な大流行が生じたことにより、筆者が所属する龍谷大学でも2020年度第１学期（以下、前期）は全面的にオンラインで授業を開講する（またはオンライン開講が不可能な授業は不開講）という未曽有の事態となった。

厚生労働省の発表によると、日本での PCR 検査陽性者数は2020年４月に１日500人を超える「第１波」、同年７月末から８月半ばにかけて１日1000人を超える「第２波」をなした（厚生労働省ウェブサイト）。「第２波」が収束傾向を見せ始める中、龍谷大学では2020年度第２学期（以下、後期）において一部で対面授業を再開している。刻々と変化する“非常事態”を日常としてそれに適応せざるを得ないというただ中にあり、しかもこの“非常事態”がいつまで続くのか、先が見通せない状況において、この間に起こった事柄を検証するのは時期尚早であろう。

本稿は、この未曽有の事態への対応をのちに検証し、教訓とするために、龍谷大学政策学部で取り組んでいる初年次教育（基礎演習）での取り組みを記録するものである。筆者は2020年度教務委員基礎演習担当として担当者会議を開催するなどしたため、学部の対応について紹介する。ただし、本稿にて述べる基礎演習に関する評価や考察はすべて筆者個人の見解であることをあらかじめお断りしておきたい。

Ⅱ　新型コロナウィルス感染拡大への全学的な対応

2020年３月11日に龍谷大学危機対策本部会議にて2020年度入学式の中止が決定された。３月23日には2020年度前期における教室での授業開始が４月21日に延期されることが、さらに３月30日には４月第１週に行われる予定であった新入生オリエンテーションを資料郵送等に代えることが決定された。それに伴い、政策学部主催の新入生対象履修説明会や、授業開始前に行われる新入生のクラス会なども中止となった。

４月６日には危機対策本部会議にて前期授業をオンライン授業として実施することが決定され、学年暦は変更しないものの、最終的に表１のような授業スケジュールが提示された。

ちなみに、ここで示されたオンライン授業の「導入期」「習熟期」「本格開始」といった表現がわかりづらく、「いつから授業が始まるのか」をめぐって教員・学生の間に混乱が生じていた。大学からはポータルサイトを通じて全学生へスケジュールを通知していたが、科目（教員）によって５月11日の「本格開始」前に事前課題等によってオンラインで授業を開始する場合もあれば、そうでない場合もあった。各科目の担当教員と受講生とが直接連絡を取る方法がなく、受講生の疑問や不安を解消する手段が限られていたことも、混乱を助長した[1)]。

そのような中で、４月16日には政府が改正新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づき全国に緊急事態宣言を発出し、龍谷大学では学生と教員の教育・研究を目的とした大学入構が禁止され、事務職員も一部在宅勤務となった。

Ⅲ　政策学部における初年次教育の取り組み

1　概　　要

政策学部の初年次教育は、１年次における履修指導科目（必修ではないが全員が履修する科目）として開講される基礎演習Ⅰ（前期）、基礎演習Ⅱ（後期）を中心に取り組まれている。まず、入学直後の新入生を大学での学びへと誘導する「基礎演習Ⅰ」について、近年の取り組み概要を述べておきたい。

基礎演習Ⅰは、講義のサブタイトルを「大学で学ぶ「読み・書き・語り」とそのための「調べ・考える」を身につける」としている。到達目標としては「書籍の要約、レジュメ・レポートの作成、研究テーマの選定、プレゼンテーションの方法、グループでの発表を通じて、大学における学びの基礎を修得するとともに、課外を含めて大学生活の送り方や大学生として求められる態度や姿勢について学ぶ。」を掲げ、基礎的なアカデミック・スキルの習得とともに、大学生活への適応や態度醸成も目的となっている。

2　授 業 内 容

具体的な授業内容はクラスによって異なるが、個人やグループで、新書などの書籍を読解し紹介するワークや、調査テーマを設定して文献資料等を参照しながらレジュメを作成し発表するなどのワークが多く取り組まれている。また、新聞記事（社説）の要約文作成と発表を定期的

表1　2020年度前期における龍谷大学の授業スケジュール

時　　期	時期区分	実施内容
4/7（授業開始予定日）～4/20	オンライン授業導入期	課題提出、資料提示、レポート提出などを行う
4/21～5/10	オンライン習熟期	LMSとビデオ会議システムの利用に習熟する
5/11～	オンライン授業本格開始	

（出典：龍谷大学危機対策本部会議報告［内部資料］をもとに、筆者作成）

表2　龍谷大学政策学部基礎演習Ⅰ共通シラバスの講義計画

回数	学　修　内　容
第1回	ガイダンス 政策学部 DP（ディプロマ・ポリシー）および CP（カリキュラム・ポリシー）についての説明
第2回	メンタリティ・プログラムによって大学生活を考えよう（共通授業）
第3回	情報教育（共通授業）
第4回	本を要約しよう－テキスト要約の作り方、批判的読解の方法、論証の仕方
第5回	要約を発表しよう
第6回	資料・文献を探そう－図書館の使い方、資料・文献の探し方、データベースの使い方、文献の扱い方、引用と注釈の付け方、参考文献リストの書き方－
第7回	レジュメを書こう－レジュメとは何か、レジュメの作成方法－
第8回	レジュメを発表しよう
第9回	レポート・論文を書こう－レポート／論文のパターン、レポート／論文の構成－
第10回	グループ探究課題を選定しよう
第11回	プレゼンテーションをしよう－プレゼンテーションの心構え、スライドの作成、口頭発表のための準備、プレゼンテーションを聞く、発表時の注意－
第12回	グループ発表のテーマを考えよう
第13回	グループ発表を準備しよう
第14回	クラス内発表会
第15回	前期振り返り、夏休み課題発表

（出典：龍谷大学2019年度シラバス）

な課題として課す場合もある。いずれも、「読み・書き・語り・調べ・考える」のための個人学習と協同学習を組み合わせたアクティブ・ラーニングである。

その他、学年全体の共通授業として、龍谷大学保健管理センターのカウンセラーがメンタルケア関連の講話を行う学生生活スタートアップ講習と、大学が提供するメールシステムや図書館データベース等についての情報処理実習（外部業者への委託）を行っている。また、後期にはキャリア・プランニングに関する共通授業が行われる。

基礎演習の授業は、約20名のクラスに分かれて各クラスを学部専任教員が担当する。クラス内には、多様な入試制度によって入学してきた学生が混在しており、付属校推薦や指定校推薦によって入学した学生には、入学前課題を課すなどしている[2)]。

基礎演習に共通テキスト等はなく、共通シラバスに基づいて各担当教員が教材を用意し、授業計画を立てて授業を行っている（表2）。クラスごとに授業内容は異なるが、例年は学期期首・期末に担当者会議を開催し、成績評価基準の統一や教材データの共有を行っている。

3　クラスサポーター

政策学部の基礎演習において重要な役割を果たしているのは、「クラスサポーター」の存在である。クラスサポーターは、基礎演習を既修した上級生で、彼らが基礎演習の授業に参加し、入学直後で期待と不安でいっぱいの新入生に大学生活全般にわたりアドバイスをしたり、グ

ループ学習の補佐など授業運営をサポートしたりする。グループでの共同作業には、フリーライダーにならない／させないための自己管理力やチームワーク、合意形成に至るプロセス形成など、いわゆるジェネリック・スキル[3)]に該当する能力も必要となる。教員１人が同時に複数のグループに深く関与し指導することは容易でなく、各クラスに３名前後配置されるクラスサポーターによる経験的アドバイスが有効であることが多い。

クラスサポーターは教員には直接言いづらい受講生の意見を聞き取って伝えることもあり、受講生と教員をつなぐ役割も持っている。授業内容は基本的にクラスの担当教員が決めるが、教員がクラスサポーターと授業運営について意見交換しながら授業を進行する場合も少なくない。クラスサポーター委員会を組織し、毎週のミーティングでクラス間の情報交換と相互研鑽に努めている。

クラスサポーターには単位付与も給与もないが、親身になってアドバイスしてくれる上級生の存在が、大学生活への適応途上にある受講生の支えとなっているようで、「自分も先輩のようになりたい」と毎年多くの学生が自発的にクラスサポーターに応募している。また、例年クラスサポーターの様子を見ていると、受講生ではなく、指導者に近い立場で授業に参加することで、自らの学びの経験を他者に「語る」「教える」という経験から、彼ら自身も学びを深め、定着させることにつながっているようである。

4　合同討論会

基礎演習Ⅰで習得した能力は、基礎演習Ⅱの一環として例年12月に開催される「基礎演習合同討論会」（以下、討論会）に向けた過程で、さらに磨かれることが期待されている。討論会では、クラスごとに設定したテーマについてレジュメを作成し、口頭発表と他クラスからの質問への応答（討論）を行う。討論会には基本的に基礎演習Ⅱ受講者が全員参加し、発表、質問、応答の役割を分担する。

討論会に向けた準備の過程では、基礎演習Ⅰで習得したアカデミック・スキルを基礎としながらも、約20名で１つのレジュメ・発表・討論を成立させるためには、合意形成やスケジュール管理、モチベーション維持などのジェネリック・スキルを、クラス運営のために活用することが必要になる。

基礎演習Ⅱは、テーマ選定やレジュメ作成の進め方がクラスによって異なる場合が多い。合意形成に時間がかかったり、いったん決めたテーマで調査を進めても行き詰まって議論が停滞したり、協力的でない受講生にどう参加してもらうかを考える必要があったりと、クラスに様々な問題が生じることがある。結果的に、基礎演習Ⅰで習得した能力を討論会で十分に発揮できずに終わることもないわけではない。

基礎演習Ⅱは、このように討論会に向けて各クラスで学習計画を立てることが求められており、共通シラバスでもほとんど具体的に授業内容が指定されていない。一面では履修指導科目であるのに多様性と流動性が高く、学習内容が具体的に明示されていないことから、一定水準以上の学びを全員に保証できない危険性もあることは、これまでにも担当者会議等で問題提起されてきた。一方では、受講生が生み出す集団のダイナミズムをいかに学習成果としての討論会での成果発表へと結びつけるかが教員、クラスサポーター、そして受講生に課せられた課題であるとも考えることができる。教員、受講生、クラスサポーターがクラスの状況を十分に把握して、常に当初の計画を見直しながら授業を進めることが必要とされている。

以上、政策学部における基礎演習の取り組み概要を述べた。次節にて、2020年度に新型コロナウィルスの感染拡大によって基礎演習に生じた影響について述べてみたい。

Ⅳ　新型コロナウィルス感染拡大による影響

1　オンライン授業開始前

Ⅱ章で述べたように、国内で新型コロナウィルスの感染拡大が始まった３月末から４月初旬は、大学での履修登録や授業開始期と重なった。４月１日の新入生オリエンテーションの中止、４月21日から教室での授業開始、さらに５月11

日からオンライン授業を「本格開始」、と重要な決定が五月雨式になされ、学内はかなり混乱していた。特に、大学側との連絡手段が確立していない新入生が、円滑かつ確実に履修登録や受講を行えるようにするために、学部として丁寧なサポートを行えるよう、教務委員会を中心に、連日対応策の検討を重ねた。基礎演習に関して学部として検討する必要があったのは、主に（1）授業計画（共通部分）の見直し、（2）新入生への連絡、（3）オンライン授業方法の検討の3つであった。

（1）授業計画（共通部分）の見直し

事前課題

最終的に5月11日にオンライン授業「本格開始」となり、それ以前の計4回分の授業を何らかの形で代替する必要が生じた。第1・2回授業を代替する事前課題として、共通シラバスの第1・2回の内容を元に教務委員会から課題例を提示した。クラス担当教員は課題例を用いるか、課題例をアレンジするか、または第1・2回の授業内容に代わる独自課題を課すか、いずれかを選択することとした。

第1回に対応する課題例として、大学／政策学部での学びについての目標設定をし、学びのイメージを持つことを目的とし、履修要項のDP・CP 等を読んで「龍谷大学政策学部で身につけたい力」「龍谷大学政策学部でこれから取り組んでみたいこと」について書くという課題を提示した。

第2回に対応する課題例は、本を読んで内容を的確に理解する方法を学ぶこと、文章の構造を理解し、批判的読解につなげるために読書ノートの作成課題を提示した。

これに加えて、大学での学びのスタイルに関する書籍の一部をテキストとして受講生にデータ送信することも検討したが、対面授業の場合のみ著作物の複製を認める著作権法に違反するため、課題例からは削除することとなった[4)]。

共通授業

第3・4回は、共通授業として予定していた大学生活スタートアップ講座と情報処理実習を、オンラインでの動画視聴によって行うこととした。大学生活スタートアップ講座では、保健管理センターのカウンセラーによる講義ができなくなったため、学生生活主任による講義とし、キャリアセンター職員によるキャリア・プランニングの講義を同時間内に実施することとなった。

結果として、第1回～第4回を共通授業とし、課題提出と動画視聴というオンデマンド型のオンライン授業によって代替することとなった。第5回以降は、5月11日のオンライン授業本格開始に合わせて、各クラスでの実質的な基礎演習授業をオンラインで始めることになる。

（2）新入生との連絡・相談体制

新入生とのファースト・コンタクト

入学式と新入生オリエンテーションが中止となったため、履修登録相談や事前課題の周知などのために、クラス担当教員が新入生と直接に連絡をとる必要があった。入学式で新入生に配布予定であった重要書類を郵送する際に、大学が発行するメールアドレスに担当教員から連絡する旨を記した文書を同封し、新入生との最初の連絡方法は「大学メール」とした。

4月1日以降、各担当教員が新入生へのメール連絡を行い、返信がない場合は電話をかけるなどしてほとんどの新入生と連絡を取り合うことができた。新入生も混乱した状況の中で不安を抱え、大学側からの連絡を待っていたと思われるが、中には大学生活が始まる実感が持てず、連絡に応答できなかったという新入生もいた。こうした学生には、クラス担当教員が個別にメールや電話で連絡をとり、状況を聞き取るなどして、多くの場合は授業に参加するようになっている。

クラスごとの連絡体制

その後、クラスごとに SNS のグループなど使いやすい連絡体制を整え、各クラスでの授業運営が始まっていく。教員と学生の連絡手段は、メール、SNS、LMS（Learning Management System）など複数のオンラインツールがある。初期は複数のツールで二重、三重に新入生に授業に関する連絡をしていたクラスもあった。特に新入生が LMS を使えるようになるには時間

がかかった。

オンライン授業の導入期・習熟期の間には、新入生からの質問や履修相談などを受け付けながら、ビデオ会議システムなどを使ってオンラインでクラス会を開催するクラスもあった。政策学部の基礎演習Ⅰ担当者の間では、新入生とのコミュニケーションをできるだけ密にして、新入生の不安を取り除くよう努めることが確認された。

教室での授業であれば授業前後に自由に話をしたり、昼食を一緒にとるなどキャンパスライフ経験を共有することで、新入生同士の友人関係ができていくが、オンラインでのコミュニケーションは時間と空間を共有する経験を欠くことから、クラスでの人間関係を構築することが難しいことが危惧された。

そこで、クラスサポーターが昼休みなどを利用して、「クラサポカフェ」と呼ばれるフリートークスペースをオンラインで開催し、大学生活に関する相談や、雑談など自由に交流できる場を提供したクラスもあった。また、動画作成やクイズアプリを使ったレクリエーションなどを取り入れて、オンライン上での共同作業を取り入れて新入生同士の関係作りを促したクラスもあった。協同学習に必要な新入生同士の関係構築は、基礎演習Ⅰの前半における最大の課題であったと言ってよいだろう。

受講生の情報通信環境

新入生の中には、情報通信環境が十分に整っていない学生もいることが考えられた。オンライン授業の本格開始までに自宅（アパート等を含む）に安定したブロードバンドインターネット通信環境を整えるか、５月以降に大学が有償で貸与する Wi-Fi ルーターとノートパソコンを利用するように伝えるほか、徒歩などで安全に来学できる場合は大学構内のセルフラーニング室（自習のためのパソコンを設置した教室）を利用できるとした。しかし、実際にはビデオ会議システムの使い方に不慣れであったり、通信が不安定で十分に授業に参加できなかったりするケースも生じた。加えて在宅勤務やオンライン受講の家族（親・きょうだい）が自宅のパソコンを使っているためにスマートフォンで受講せざるを得ないなどの事情を抱える学生もいた。学生が使用できる情報機器の様々な制約を考慮して課題を課す必要があった。

（３）オンライン授業の方法

クラスの雰囲気作り

５月11日以降に本格開始されたオンライン授業の具体的な進め方は、基礎演習クラスによって違いがあるが、５月中は導入期として、新聞記事の要約や新書の読解など、「読み・書き・語る」の基礎訓練を兼ねて、受講生同士の小グループでの議論の機会を多く作り、積極的に意見交換ができる雰囲気づくりに努めたクラスが多かった。

ビデオ会議システムを使ったオンライン授業の場合に、受講生がカメラを ON にして「顔出し」するように指示するかどうかは判断が分かれるところである。通信環境が悪い場合や、自宅の様子が背景に映し出されてしまうことから、「顔出し」を強制すべきでないとする考えがある一方で、受講生同士の関係構築には、顔を見ながらのコミュニケーションが重要であるという考えもある。担当者会議で報告されたあるクラスの例では、小グループに分けると自然と「顔出し」するので、その延長で全体でも「顔出し」し、お互いの表情を見て授業を進めることができたという。

レジュメの作成・発表

５月はスタートアップに時間を要したクラスが多かったが、６～７月にはレジュメ作りを開始し、発表会やディベートなどに取り組むという流れで、例年の基礎演習Ⅰで取り組んできた内容を、オンライン授業でも概ね実施できていた。筆者が担当したクラスでは、レジュメの作成と発表の際にはクラウド（Google Drive）での文書共有や共同編集の機能を活用し、グループでの協同学習を行った。受講生たちは、授業時間内だけでなく、空き時間に自発的にビデオ会議システムや SNS を使ったミーティングにも取り組んでいた。教室での対面授業では、１台のパソコンの画面を複数人で囲んで文書を共同作成すると作業人数が限られてしまい意外と難しいものだが、ビデオ会議システムとクラウ

ドを使えば、各人が編集画面を目前に見ながら議論をし、入力することもできる。通学時間や課外活動の時間が節約されており、授業外のミーティングもオンラインだからこそ密に行えるという面もあったようだ。

基礎演習に限らないが、オンライン授業全般について学生から寄せられる意見には、「授業に集中しやすい」「チャット機能を使って直接意見を言うことができる」といった肯定的な意見もある。筆者も、学習内容への受講生の集中度は例年以上に高かったという感覚を得ている。筆者のクラスの受講生からは、「この授業（基礎演習）でやっと大学生らしいことをしていると感じた」という感想も聞かれた。オンラインでも演習授業として成り立っていたと言ってよいだろう。

前期授業の終わりが見えてきた頃には、教員も受講生もオンライン授業の進行に慣れ、オンラインツールの充実を実感するとともに、それらを活用したオンライン授業を積極的に評価すべき側面を感じることができていた。学期末の担当者会議で各クラスの担当教員にシラバスの到達目標達成度合いを尋ねたところ、どのクラスも課題はありながら「概ね達成できた」という評価であった。

クラスサポーターの役割

一度も対面することなく基礎演習の授業を進めるうえで、クラスサポーターの役割は大きかった。クラスサポーター自身も初めての経験で戸惑いを感じていたであろうが、受講生同士の関係構築や、グループでの議論の進行、レジュメや発表内容へのコメントなど、どのクラスでも例年以上の活躍を見せていたとのことであった。例年、上級生としての彼らの存在によって、アカデミック・スキルの習得にとどまらず、大学生活に必要な学びの態度醸成など、教員の説明だけでは習得し難しい資質の向上も図ることができている。その存在感は、オンライン授業でも損なわれることはなかったように思われる。

各クラスには、年度当初３名程度のクラスサポーターが配置されたが、約20名の受講生を小グループに分けて意見交換をする場合、ファシリテーター役となるクラスサポーターが多い方がよいという意見が複数の教員から出された。そこで、教務委員会がクラスサポーター委員会と協議し、クラスサポーター経験者の上級生に呼びかけて必要な人数を増員することができた。就職活動などで多忙な中、緊急の求めに応じてくれた学生たちには感謝したい。

Ⅴ　おわりに

期待と不安を胸に大学生活の開始を待っていた新入生にとって、新型コロナウィルス感染拡大によって大学に通学することができなくなり、画面上でしかクラスメイトや教員とコミュニケーションをとることができない状況は、大きな困難であっただろう。

しかし、オンライン・コミュニケーション・ツールの充実とクラスサポーターの存在により、オンラインによる初年次教育は（課題はありながらも）実施できることもまた、この半年間の試行錯誤からわかってきたことである。とはいえ、オンライン授業は従来の対面授業を代替するものとなるかと言えば、少なくとも基礎演習の経験からはそうではない。オンラインツールをうまく活用すれば、本の読み方やレジュメの作り方は学び、習得することが可能である。しかし、大学での学びの態度醸成やクラスメイトとの信頼関係構築は、教員やクラスサポーターの工夫によって時間をかけながら何とか可能となったが、容易ではなかった。

これまで、教室において教員は無意識のうちに受講生の様子を観察し、時に雑談もする中で彼らの様子を把握し、こちらのメッセージ（情動）を伝えることができた。受講生も、教員やクラスサポーターの立ち居振る舞いを見て理解し「盗む」ことも、できていたかもしれない。受講生同士が昼食を一緒に取ったり、雑談をしたりする中で、お互いの人格への理解も進み、人間関係はつくられていく。しかし、オンラインではそうした非言語コミュニケーションや身体的な経験は大きく制限されてしまい、とりわけジェネリック・スキルの一部は習得することが難しくなるように思われる。基礎演習で取り

組む協同学習や討論会の準備過程の経験から得られる能力を他の方法で獲得しようとするなら、教員・学生双方が新しい教育・学びのスタイルを編み出さなければならない。

今後、オンラインツールを有効に活用しながら、対面での教育をより充実させるために、まずは基礎演習で学生が習得すべき（できる）知識・技術・能力・態度を教員・学生自身が改めて言語化し意識化する必要がある。これまで「なんとなく」教えていたことが何なのか、学生がいかにしてそれらを習得するか、オンラインツールを使うことでより充実するのはどの部分なのか、より深く考えていく必要があるのではないか。今回はあまりに突然のオンライン授業への導入だったため、正直に言えばそこまで考える余裕はなかったが、従来の教育内容を改めて振り返るという課題を突きつけられたように思う。

2020年10月１日現在、龍谷大学では後期授業において演習や実習などの少人数授業を中心に、教室での対面授業を再開している。基礎演習Ⅱでもオンライン授業と対面授業を織り交ぜる形で授業が進行しつつある。半年遅れでキャンパスライフをスタートさせた１年生たちは、クラスメイトと顔を合わせてコミュニケーションをとれることの喜びに満ちている。しかし新型コロナウィルス感染症の拡大は未だ予断を許す状況になく、300名規模の討論会を従来通り対面で開催するのは現実的に難しい。今後もパンデミックや大規模災害など、想像を超える非常事態が起こる可能性もある。次なる非常事態に備えつつ、オンラインツールを活用しながら対面授業をより質の高いものにする努力が必要である。半期のオンライン授業で得たものは多く、今後の教育に活かしていきたい。

参考文献

厚生労働省ウェブサイト「新型コロナウィルス感染症について」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html（2020年10月10日最終閲覧）
清水禎文（2012）「ジェネリック・スキル論の展開とその政策的背景」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第61集第１号，275-278.
龍谷大学「2019年度政策学部基礎演習Ⅰシラバス」

注

1） 履修登録期間が延長され、受講者が確定するのが遅かったために履修登録を前提とする LMS（Learning Management System）が機能するまでには時間を要したこと、LMS の掲示板等で連絡内容を発信することはできるが、受講生が自ら LMS にアクセスしなければ伝わらないなど、授業に関する連絡は LMS 頼みであったのだが、使い勝手には物足りなさを感じた。これまで教員と学生の間のコミュニケーション回路が「対面」することに偏重していたこともまた、痛感させられた。

2） 付属校推薦入学予定者を対象にした Ryu-sei gap-term は、政策学部が独自に取り組む入学前教育である。入学予定者が来学し、（１）後述する討論会の見学、（２）政策学部の課外活動「RYU-SEI GAP」参加者等へのインタビューから新聞記事を作成し発表する。新聞記事の作成にあたっては、京都新聞社に協力いただき、新聞記事作成のための講義を受ける。政策学部の正課・課外の学びに対するモチベーション向上と、入学後の目標設定を目的とし、2014年度から行っている。

3） ジェネリック・スキルの定義は不明確で曖昧なところがあるが、産業界や雇用者が求める雇用可能性を高める能力と、生涯学習やシチズンシップ（市民性）教育の観点からコミュニティ（地域）へ積極的に関与する能力という大きく２つの流れがあるとされる。いずれにしても、リテラシーに関する基礎スキルだけでなく、コミュニケーション、チームワーク、人間関係、様々な思考方法、組織づくり、自己管理など、対人関係の中で磨かれる資質能力が多く含まれる（清水，2012）。

4） 2018年度の著作権法改正によって「授業目的公衆送信補償金制度」が2021年５月24日までに開始されることになっていた。この制度のもとでは、補償金を授業目的講習送信補償金等管理協会に支払えば、遠隔授業の際に無許諾で著作物のデータ送信を行える。文化庁著作権課は2020年３月４日に「教育機関において講習送信を行う場合には、原則として、現行法に基づき権利者の許諾を要する」旨の事務連絡を関係団体あてに発信している。しかし、政府は2020年４月28日に改正著作権法を前倒しで施行し、2020年度に限り補償金を無償とする特例措置をとった。